

製糸都市須坂における歴史的景観の保全

大橋智美・和泉貴士・小田宏信・斎藤 功

キーワード：製糸業、産業景観、街なみ保存、須坂市

I はじめに

近年、全国で街なみ保存の機運が高まっている。街なみは地域の歴史や風土がはぐくんだ、まさにその地域の「顔」であるといえる。このような街なみは、著しい経済成長が続いた1960年代に都市が成長するにつれて、住宅の建設や道路の拡幅ともなう用地の確保、あるいは建物の老朽化のために次第に取り壊されていった。しかし地域の住民やそこを訪れる人たちによって街なみの美しさ、安らぎ、歴史的価値が認識されるようになると、次第に自分が住んでいる民家や蔵を再発見する動きが高まるようになった。

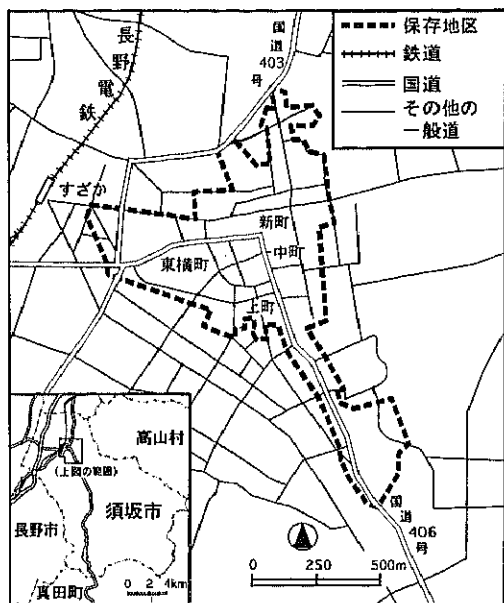
街なみ保存における大きな出来事のひとつとして、文化財保護法の改正がある。1975年に文化財保護法が改正され、文化的に重要な意味を持つ歴史的街なみの保存が制度化された。また、1978年には「全国町並みゼミ」が設立された。これは開発によって歴史的街なみが次第に失われていくなかで、全国から街なみ保存に関わる人々を集め、今後の保存運動について意見交換を行なうことを目的としていた。このゼミには現在全国から77の団体が加盟している。1980年ごろからは自治体も街なみ保存に関心を寄せるようになり、個性あるまちづくり、歴史を生かしたまちづくりが行われるようになった。

地理学においては、これまでに歴史的景観や街なみに関する研究がなされている。溝尾ほか¹⁾は

埼玉県川越市を事例に、街なみ保存と商業振興、観光客数の変化について分析している。結果としては住民と行政の連携による蔵作りの街なみ保存運動が進められ、それを高く評価した観光客が商店街に高い経済効果をもたらし、住民の意識の高まりにつながったと論じている。しかしひとつの地域における街なみを総体的にとらえ、その形成過程を地形や交通といった地理的特性と関連付けて詳細に論じた研究は少ない。歴史的街なみを生かしたまちづくりに成功した都市の事例を模倣することよりも、むしろ地域の歴史、風土にあった街なみ保存を行なうべきである。そして、その土地の風土とのかかわり合いの中で、現在の街なみがどのように形成されたのかを詳細に調べる必要があろう。

本研究で対象地域とする須坂市は長野県の北東部に位置し、千曲川を境界として長野市と隣接している(第1図)。2002年10月現在、面積149.84km²、54,412人の人口を擁する須坂市は、明治初期からの製糸業の発展を皮切りに、1954年の市制施行以降は電子工業の発展、また長野市のベッドタウンとして大規模団地や大型ショッピングセンターの建設が相次ぎ、上高井地方の中核都市としての発展を続けている。

このような須坂の発展を支えたのは、交通の要衝という特性であった。旧大笹街道、旧谷街道、旧山田道という三街道の分岐点が現在の市街地の



第1図 研究対象地域

ほぼ中心に位置しており、江戸時代から多くの商人の往来があったといわれている。明治期には製糸業が栄え、須坂の生糸は横浜港からヨーロッパへと輸出された。製糸業の繁栄によってもたらされた急速な都市の発展に基盤整備が追いつかず、須坂の中心市街地は細い路地の入り組んだ巨大迷路のような構造になっている。また、このころに製糸業を営んでいた製糸家の家屋は現在でもほとんど壊されることなく残されており、蔵造り、大壁造りの街なみを生かしたまちづくり運動が進められている。

本報告では、まず製糸業の時代からの都市発展・産業発展の過程を概観しつつ、用水利用と結び付いた伝統的な敷地利用のあり方を再確認する。その上で、現在の土地利用および歴史的建築景観の残存・保存状況を分析する。さらに、それらを踏えて、須坂市の街なみ保存運動の歩みとその機構を行政・住民の両サイドから明らかにし、考察を加えたい。

Ⅱ 製糸業からの都市発展・産業発展

Ⅱ-1 裏川用水と都市形成・産業形成

須坂の中心市街地は、千曲川へ合流する百々川の形成する扇状地上に位置する。上州から鳥居峠を經由する大笹街道、万座峠を經由する山田道がこの須坂で合流し、善光寺平の各方面へと結節されていた。須坂の発達はこのように交通の要衝に位置していたことに加え、扇状地上の緩斜面を利用して落差を作り水車動力を得ることに好都合であったことに帰せられる²⁾。

中心市街地には百々川より分流した裏川用水網が北流している。用水は各屋敷の裏側を流れており、そのことが「裏川」用水の語源となったものと思われる。そこに水車を仕掛けてその動力を利用した精米や搾油が藩政期より主だった屋敷で行われており、このことが精米業・搾油業などの工業、穀商・油商等の商業を発達させる要因となった。末尾の分析³⁾においても、須坂は水車を30台以上保有する「水車集落」に位置付けられていた。

製糸技術が須坂に伝わるのは、18世紀の末期から19世紀の初頭にかけてとみられ、天保年間には「糸師仲間」が形成されていた。座繰製糸がもたらされたのは1860(万延元)年のことであるが、幕末から明治初期にかけて、町の商業資本(穀商や油商)によって座繰製糸業が発達した。さらに、1874(明治7)年には器械製糸が導入され、裏川用水路の水車利用に基づいて須坂の製糸業を飛躍的に発達させることになった。1875(明治8)年には日本初の製糸結社「東行社」が設立され、1878(明治11)年には東行社の共同揚げ返し所が建築された。さらに、東行社からの分離によって、1880(明治13)年には信正社、1884(明治17)年には俊明社が設立された。

1889(明治22)年に101を数えた製糸所数は、1909(明治42)年までに43に減少するが、同年の釜数は4,865、従業者6,147人と、須坂は日露戦争を経て明治末期までに須坂は長野県内では岡谷に次ぐ製糸業の町となった⁴⁾。以後、釜数は1911(大正2)年に6,175、従業者数は1915(大正6)

年に7,024人とピークを迎えた。なお、1920（大正11）年には、岡谷より片倉資本が進出して、油商から発展した升一田中製糸所と合併している。さらに片倉田中製糸所は1942（昭和17）年に富士通信機に買収され、これがきっかけとなって、戦後の電子工業化への途が開かれることになった。

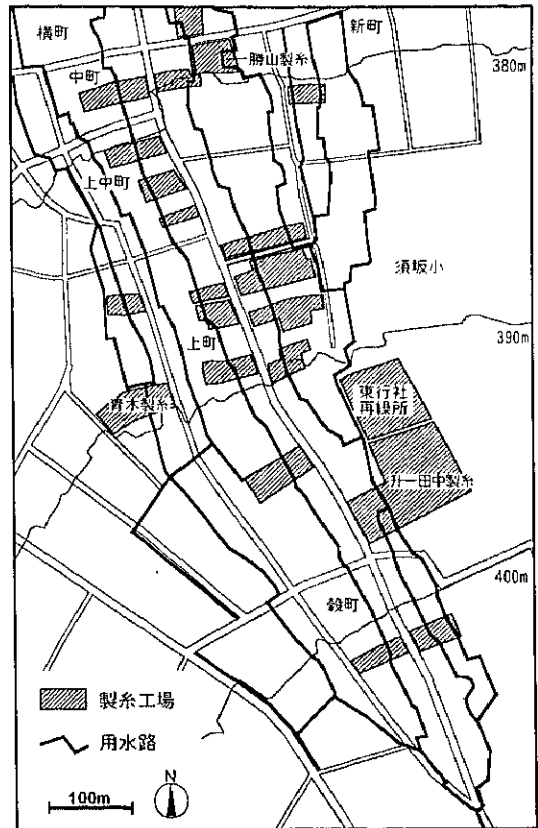
第二次世界大戦後も23の製糸工場が操業を続けたが、1967年頃までに大半の製糸工場は廃業もしくは転業し、1986年には須坂市最後の製糸工場が操業を停止した。製糸業に代わって、ニット類の生産も試みられたが、電気・電子機器工業がもっとも卓越した。1990年には電気・電子機器関連の工場は80事業所、従業者4,049人を数えた。

電気・電子関連の企業には、富士通の2次下請として新たに起業したものが多いが、製糸業からの転業も少なくはない。上中町の山叶神林（神鶴）製糸所は1943（昭和18）年に転業して神林製作所（現・テクノエクスセル）に、東横町の角一牧製糸は1957年に転業し日東工業（現・ニットー）に、上町の山キ青木製糸も同年転業して墨坂産業に、馬場町の昭栄製糸は1970年に転業して昭栄電子工業（現・富士通高見沢コンポーネント）になった。また、プラスチック成形業に転業した事例ではあるが、東横町の金一広田製糸は1964年に転業して広田産業になった。これらのうち、角一牧製糸および青木製糸の事例については後述したい。

II-2 現在の裏川用水路網

上述したように百々川扇状地上における裏川用水の存在は、幕末期には商業資本を育み、さらに明治期には器械製糸業の発展を揺籃して、須坂をして県下第2位の生糸産地にせしめた。

水力を利用した器械製糸業の発達は、工場内部にも大きな変化をもたらした。座繰製糸から機械製糸業への移行は、製糸工女を足踏み作業から解放し、女工が立ち繰りすることを可能にした。器械製糸による立ち繰り作業は、当時はおっぱら輸出用の糸を繰るためのものとされており、このことは輸出用器械製糸への転換を意味していたのである。



第2図 長野県須坂市における裏川用水網と大正年間における製糸工場の分布

注1) 裏川用水網は2002年6月現地調査により復原。

注2) 製糸工場の分布は大正6年発行「長野県上高井郡須坂町全図」に基づき記載。

注3) 道路網は2002年現在のものであるが、主要道路のみ記載。

須坂における製糸業の発展を支えた裏川用水の流路と水車の分布に関しては、『上高井誌』に所収されている今井誠太郎氏による図面に描かれており、1878（明治11）年および1890（明治23）年における器械製糸工場の水車利用の全体像を把握できる。しかし、今井氏による図面は、必ずしも正確なスケールマップではなく、今日の土地利用との照合関係が把握しにくいという問題点を有している。

そこで、筆者らは実地調査によって、2500分の

1 都市計画図上に用水路を記入し、今日における用水路網を地図化するを試みた。その結果、得られたものが第2図である。用水は大部分で民有地内を通過し、さらに建築物の直下を通過している部分も多いため、本図では数メートルの誤差が生じている部分もあり得るが、概ね現実と符号しているものと考えられる。⁵⁾

さらに本図には、1915（大正6）年における器械製糸工場の敷地分布を重ねている。これは、同年に刊行された「長野県上高井郡須坂全図」に基づくものである。大正期には、明治期のピーク時に比べ製糸工場の数は大きく減じられているが、同種の案内図の中では同図が最もスケールマップに近く、現在の地図上にプロットしやすいことから同図を利用した。その結果、すべての製糸家の旧敷地内に裏川用水が通過していることがわかった。唯一、旧東行社再繰所（現・長野県農村工業試験所）敷地内には用水路が確認されなかったが、今井図には同敷地内への分流が認められる。

試みに、本図から中心市街地内の傾斜を算出してみると、大笹街道に沿った中町交差点付近から穀町付近までの平均勾配は32%程度であることがわかった。すなわち1000mの水平距離に対して、32mの垂直距離となる。仮に、18m（10間）の間口の敷地を想定した場合、計算上、最大で約58cmの落差の滝を得ることができたのである。実際には、製糸工場の多くは30m以上の敷地幅を有していたため、あるいは隣接敷地内から樋で導

水することによって、さらなる落差を得ることが可能であった。このような落差の滝は水車を回すには十分であったと言えよう。

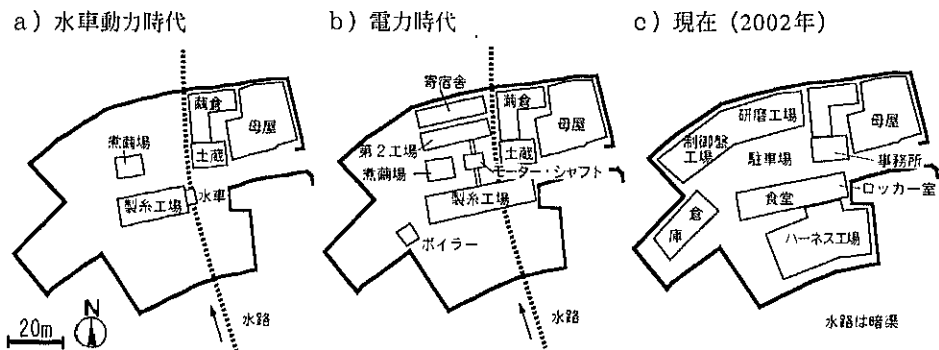
裏川用水は器械製糸業の発展にのみ貢献してきたわけではない。水路に引き入れられた水は、水路をわたる橋をくぐり、建物内の水車を稼働させていった。次の屋敷へと移る出口には、化粧された石材が使われており、他にも様々な意匠が凝らされていた。また、裏側用水は回遊式座繰のほか、田中本家の迎賓館、旧田中製糸場の迎賓館の下を通過しており、訪れる客に涼を与えた。このことは裏川用水が製糸用などの工業用水としてばかりではなく、生活用水としても大切に使われてきたことを示しているものであろう。

II-3 旧製糸家の屋敷地利用と産業展開

1) 旧勝山製糸

ここではまず、敷地内にかつての製糸工場時代の建物が残る事例として、新町の旧勝山製糸をとりあげる。勝山家は現在タバコ屋を営んでおり、市からの補助金を受けて道路に面した店舗のみを修復している。

勝山家は1876（明治9）年に東行社に加盟し、当時須坂で盛んであった製糸業を創業した。敷地内には裏川用水が流れているが、敷地のほぼ中央部には釜場として利用されていた建物が残されており、ここに水車があったと考えられる（第3図）。この建物はかつて工場であった建物（現在



第3図 旧製糸工場における屋敷地利用（旧勝山製糸）
（現地調査より作成）

は取り壊されて残っていない)とつながっており、水車が須坂小唄にある「カッタカタ」という音を鳴らし、シルクロードの起点と呼ばれるにふさわしい質の高い生糸が生産されていた。

しかし、大正期に入ると価格が安く大量に生産することのできる人口繊維に製糸業は押され始め、須坂の製糸業にも衰退の影が見え始める。このような背景の中で、勝山家も1916~17(大正7~8)年の間に製糸業を廃業した。勝山製糸所は毎年工具を中野・飯山といった下高井地方から募集していた。しかし個人経営で規模もさほど大きくなかった同社にとって、工具の募集は非常に困難であったようである。とくにこの地方は冬の豪雪に悩まされる地域であり、雪の降る中を工具募集のために出かけることは困難であった。また、一冬の間地元に戻ることのできない工具たちすべてに宿と食事を与えるのは、製糸業が傾きかけていた時代には至難の業であった。

勝山家では製糸業廃業後も、しばらくは繭を買う商売を続けていた。現在タバコ屋として利用されている上店は、当時は繭を仕入れる店舗としての機能を果たしていた。また、敷地内には蚕室(かつての寄宿舎)も設けられており、製糸業廃業後も、生糸を扱う技術を生かした生業を行なっ



写真1 勝山邸内の用水路
(2002年6月, 和泉撮影)

ていたことがわかる。上店で仕入れられた繭は、敷地の南奥にある繭蔵に保管された。この繭蔵は現在では建物が解体されてなくなっているが、1950年前後に解体された際、その建築的価値を惜しむ声があり、建物の素材をそのまま長野市に移し、そこに再び蔵が建てられたという経緯を持つ。

屋敷地においては、製糸業を営んでいたころの建物は一部を除いてほとんどかつての姿のまま残されている。それは生糸を作る動力としての水車を中心に建物が配置されていたからに他ならない。水車のあった釜場と工場につながっており、工場と母屋は隣接していた。また、工場で働く工具たちの寄宿舎は裏川用水を挟んで釜場の反対に位置しており、繭を保管する蔵、土蔵、味噌蔵、保健室といった関連施設が敷地の南面に立ち並ぶ。このように建物が敷地内で分散していなかったことが、旧勝山製糸の敷地内において製糸時代の建物が保存されたのもっとも大きな要因である。

2) 旧青木製糸

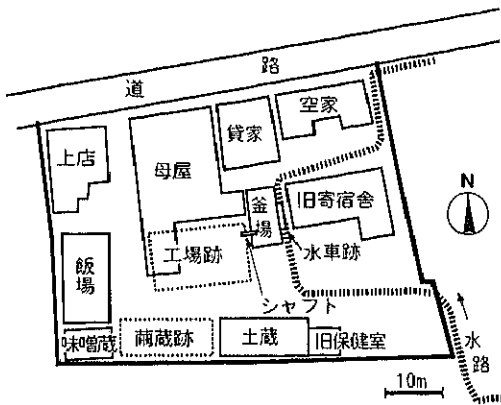
次にとりあげるのは、須坂市上町の青木家の敷地利用と工場経営である。青木製糸所が創業したのは1873(明治6)年のことである。それまで有力な糸商でもあった創業者青木甚九郎氏は、当時の「製糸家13人衆」の一人に数えられ、1877(明治10)年に東行社が設立された際には同社の副社長に就任した。屋号は「山キ」であった。

創業当初、動力には裏川用水によってもたらされる水車動力を利用していた。母屋(1869年の須坂騒動によって消失後再建)および土蔵(明治初期築造)の裏手、用水路を隔てた反対側に製糸工場がおかれ、その北側には煮繭場が配置された(第4図a)(写真2)。「須坂沿革表」によると、1876(明治9)年には同製糸所の人数は24とある。

以後、明治中期には製糸工場の西側にボイラーがおかれ、水車動力と蒸気機関とが併用された。1893(明治27)年の従業者は50人であった。1915(大正6)年には、60釜73名を数えており、この間に寄宿舎や第2工場が建築されたものとみられる。その後、電力原動機導入の際には、第1工場と第2工場の間に「モーター小屋」が置かれ、

シャフトで両工場に動力が伝導された（第4図b）。以後、1942（昭和17）年まで、60釜前後、従業員60～80名で推移している。第二次世界大戦中は軍事物資を生産し、富士通に供給した。戦後は製糸業に戻るが同業3社と信濃蚕糸を発足し、同工場も信濃蚕糸の一工場になった。

1957年には信濃蚕糸から分離して墨坂産業を発足し、グンゼや福助ブランドの靴下の製造を手掛けるとともに、自社ブランド「ハクバ」のスキー板や各種スポーツ用品の生産を行った。『長野県工場名簿』によると、1959年に41人であった同社の従業員規模は徐々に拡大して、1973年には106人



第4図 旧製糸工場における屋敷地利用（旧青木製糸）
（現地調査より作成）



写真2 青木製糸の土蔵
（2002年6月、小田撮影）

に達した。スキー板とスポーツ用品を製造する体制は1980年代初頭まで続くが、1960年代半ばからは富士通長野工場からの受注による電話交換機用ハーネスの生産に着手し、後者の占める比重が増していった。

大きな転換点は、1980年代半ばの円高不況であり、同社は大きく生産規模を縮小して、小ロット製品中心への転換を計った。今日、ハーネス、制御盤、液晶用のガラス研磨の3部門からなる経営を継続している。

3) 角一牧製糸

東横町の「角一」牧家も青木家と同様、製糸業の時代から由来する企業家である。青木家と同様、揚枿は東行社であり、第二次世界大戦後は信濃蚕糸の経営に参画したことも共通している。

牧熊吉氏を初代当主とする「角一」牧家は牧総本家の3番目の分家であり、最初の分家が「山二」、次の分家の「山三」に対し、屋号は「山四」となるところであるが、忌数であるため「角一」の屋号となった。

角一牧製糸の創業は1876（明治10）年であり、1893（明治27）年には従業員64名を数えた。裏川用水が本町通りに沿って、東横町まで導水されており、本地点でも水力利用が可能であった。以後、1901（明治35）年76人、1923（大正14）年111名（98釜）、1931（昭和6）年114名（100釜）、1942（昭和17年）132名（118釜）と推移した。第二次世界大戦中は軍事徴用され、三鷹市より疎開した長野日本無線にマイクロコンデンサーを供給した。

戦後もコンデンサー生産を継続してコンデンサー部門は「日東工業」を名乗った。日本無線の「日」と東行社の「東」を合成して命名したものであった。一方、本体の角一牧製糸の方は、共同出資した信濃蚕糸の解散後も1967年まで製糸業を継続するが、1955年には同社光学部を発足してガラス研磨業務を開始している。製糸業の廃業後、角一牧製糸光学部も日東工業（現・ニッソー）に一元化され、1980年代半ばまで、コンデンサー生産とガラス生産を両輪とする経営が続いた。円高不況を契機に1988年にコンデンサー部門から撤退

し、以後、電子機器用のガラス研磨が主力となっている。

同社が最初に手掛けたガラス研磨は、双眼鏡のレンズフィルターであった。以後、時計のカバーガラス、ICの基盤蒸着用ガラス、電卓の液晶用ガラス、さらには液晶ディスプレイ用のガラス研磨へと発達した。とくにIC用のガラスを手掛けて以降、同社は比較的売り上げを伸ばし、1980年代半ばに第2工場、2000年には須坂市村山に4500坪の敷地を有する新社屋および本社工場を建設し、従業員も2002年現在、320人にまで拡大している。新工場では、大手3社への液晶ディスプレイ用のガラス供給を主力とし、東横町の旧本社工場（第3工場）でも70人規模で小型液晶用のガラス研磨を継続している。2002年9月には現地資本との合弁によって台湾工場（台南）が操業開始となった。

Ⅲ 須坂市中心部の土地利用と景観

Ⅲ-1 土地利用

須坂市中心部の土地利用を2002年6月に調査したものが、第5図である。須坂市中心部の土地利用に大きな影響を与えたのは、明治時代の製糸業の隆盛から衰退までの歴史と、現在進められている景観保全運動の二つである。歴史的な経緯や詳細についてはⅡ章において記述されているのでここでは触れない。

1986年を起源とする歴史的景観保存の運動⁹⁾が、器械製糸業全盛期の建造物と景観を残し、新たな景観の形成に大きく寄与している。1990年代以降、歴史的景観保存の運動はさらなる高まりをみせた。詳細な記述は次章に譲るが、このような背景から須坂市は景観保護の施策を実施するにいたった。大笹街道・山田道に面する区域に現存する歴史的な建造物・景観を保全するために、市は国の補助金を得て街なみ環境整備事業を推進している。この施策によって、須坂市中心部では行政の事業計画の元で統一感のある景観が形成されつつある。

表通りと路地裏では、街なみ環境整備事業の成

果の現れ方に差が現れ始めている。表通りでは、事業計画に沿って建物の色彩・形状・外壁の材質などが整えられている。

以下では調査対象地域における土地利用と景観の特徴を地区ごとに説明していく。

1) 東横町

須坂駅から旧市街地に向かう際の玄関口にあたる東横町は工業と商業が中心の地区である。須坂ショッピングセンターパルムを筆頭に、銀行やコンビニエンスストア、呉服店などが集まっている。本地区は製糸業の全盛期にはその核心の一つであり、牧一族の製糸工場群が操業していた。今日、「山一（牧総本家：現本藤家）」はクラシック美術館として開放され、「山二」の重厚な屋敷は往時の佇まいを今日に伝える。「角一」のあった屋敷地には3階建ての藁倉が現存している（写真3）。その敷地に西隣している牧光学は「角一」家から分家した織布工場であったが第二次世界大戦後、レンズ研磨業に転業した。また、須坂ショッピングセンターのある区画には、1960年代の後半まで秋田工場（鋳鉄管製造）および興和ゴム工場が位置していた。それらの工場が松川工場団地等に移転後、同センターが整備された。

2) 横町

横町は東横町と比較すると工業機能の色彩が薄く、商業機能が卓越している。1875（明治8）年という早い段階から横町には製糸業があったが、

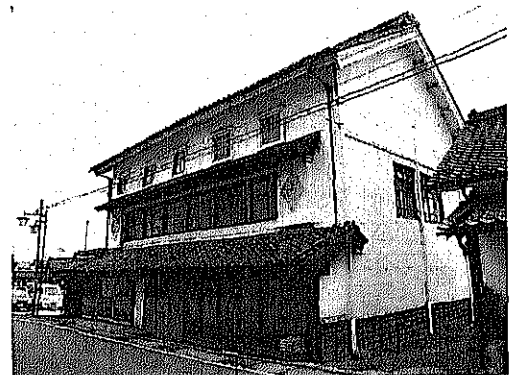


写真3 牧家の土蔵
(2002年6月、小田撮影)

製糸業の発展から衰退までのすべての時期を通して、最大で5つの工場が位置していた⁷⁾。現在では山田道に面して多くの八百屋、食料品店、家具屋、金物屋などが立ち並んでおり、かつては須坂における商業機能の一端を担っていた。買回品を扱う商店が多いことから、この地区の商業機能の重要性をうかがい知ることができる。とくに金物屋は「八幡屋」の屋号を持つかつての豪商で、創業300年もの歴史を有する。屋敷地は奥行80m、大小10もの蔵があり、明治期まで豪壮な長屋門があったほどである。

地区の西側から街なみ環境整備事業がすすめられており、1995年に全国的にも珍しい2段の笠鉾を展示する、笠鉾会館ドリームホールが建設された。

3) 中町

中町は大笹街道と山田道が結節する中町交差点付近を中心に、須坂市内で最も商業機能が集中している。それを表しているのが、呉服屋や銀行などの立地である。地区の北には須坂を代表する豪商であり、銀行家であり、製糸家である小田切幸一の館がある。小田切家のすぐ南には、善光寺地震で長野から移って以来の須坂での歴史をもつ中野家がある。中野家は屋号を「綿幸」といって呉服を商っている。現在の八十二銀行の南向かいの区画は現在駐車場であるが、かつては須坂市の商工会議所があった。駐車場の南隣には山下薬局がある。享保年間より須坂で業を商っており、善光寺平一円の医師85名と取引があったという。

中町交差点の南西の区画には飲楽街が形成されており、居酒屋やパブなどがいくつもみられる。区画の中央部には女工長屋の遺構がある。この区画には明治期には「角二」牧家の製糸工場があった。同製糸場は1877年(明治19年)に創業し、1935年(昭和10年)前後まで継続した。

4) 新町

新町は住宅が中心の地区である。この地区にはかつて2軒の製糸工場があった。その建物は浦野家・勝山家の両家共に現存している。勝山家は1877(明治9)年に製糸業を始め、1917(大正7)

年に操業を停止している。その後は転業したが、工場の建物はその後もほぼ当時のままの姿で残されてきた。山田道を挟んで北向かいの浦野家も同じ時期に製糸業を営んでいた。新町の西には「塩屋」の屋号をもつ上原家がある。上原家は幕末には現在の場所で商いを営んでおり、豆蔵・まき蔵・味噌蔵などが当時は林立していた。一時期製糸業を営んでいたこともある。

5) 上中町・本上町

上中町は住宅・商店が混在している。西側にはかつての城下町に特有の鍵の字型の街路がみられる。その通りに金物屋や薬局などが軒を連ねている。街路の鍵の字に折れた地点から南を劇場通りという。通りの名を記したアーチが残されているが、それがわかるような建物は見つけられない。一部に再開発されたところもあり、高層の集合住宅などもある。駐車場が極めて少ないことが、他の地区と大きく異なっている。

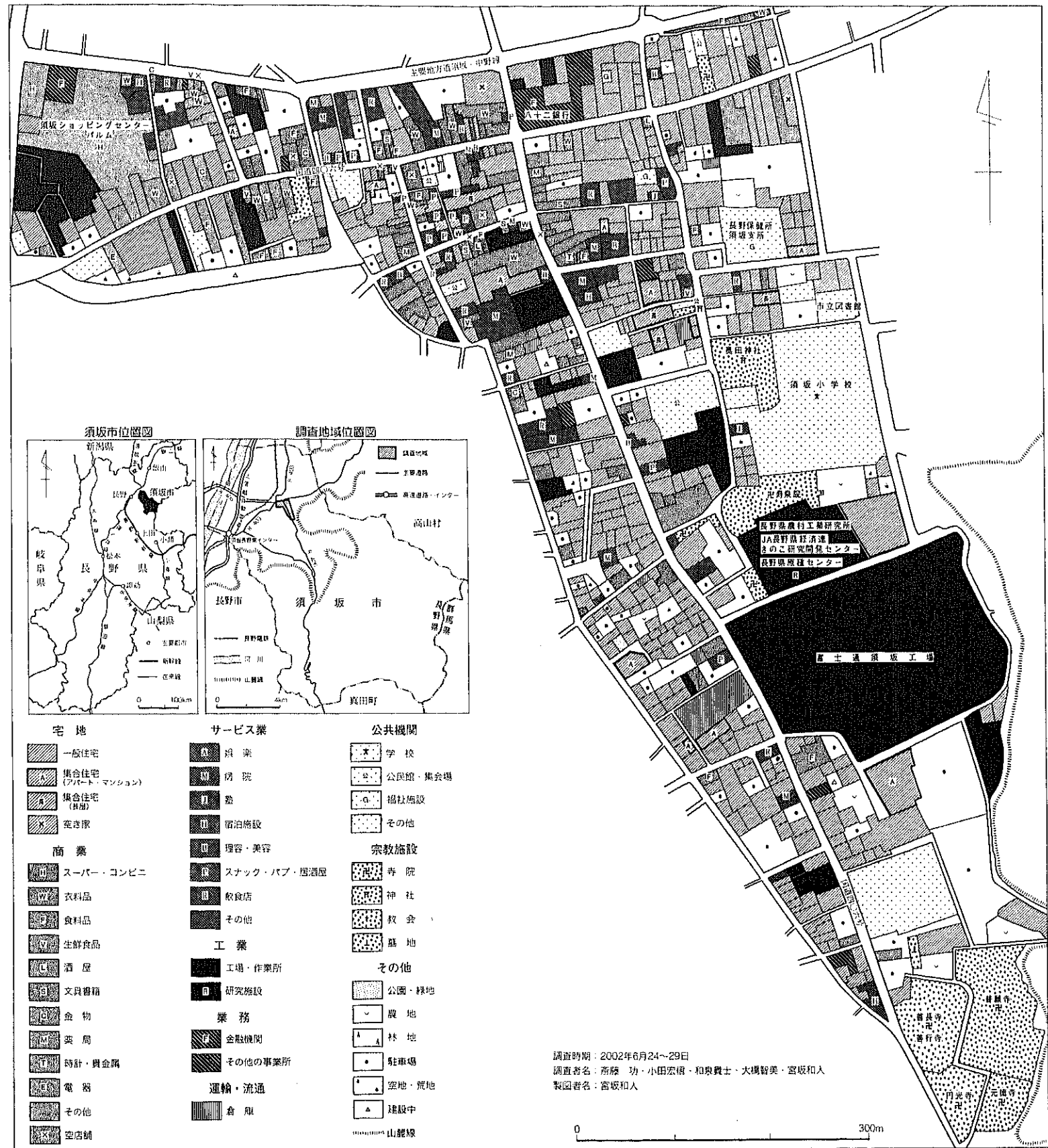
本上町には大笹街道の西側に遠藤酒造がある。この建物は須坂藩の館の大手にあたる。幕末の「旧須坂藩家中之図」⁸⁾によると、遠藤家の敷地は藩主奥方の居間があった位置にあたる。1872(明治5)年に廃城した際に遠藤家が買い取り、一時製糸業を営んでいたこともあったが、現在は造り酒屋である⁹⁾。

6) 上町

現在は住宅以外の土地利用がほとんどみられない。しかし、かつては須坂製糸業の中心地のひとつであった。今日長野県農村工場試験場がある区画には共同再操会社の東行社があり、また大笹街道の西側、「山吉」の屋号をもつ明治以前からの製糸家である神林家の製糸工場があった。再開発が進んでいる住宅地であり区画の中央に新たに道路が通され、また上町コミュニティーパークという名で公園が整備されている。高層の集合住宅も建設されている。

7) 常盤町

小学校、保育園、高校などが集まった文教地区とすることができるのは常盤町である。図書館、公民館、保健所なども立地している。なかでも現



第5図 須坂市中心部における土地利用図

在の長野保健所須坂支所には、1917年に（大正6年）に開所した上高井郡役所の建物が現存している。郡役所としてこの建物が使用された期間は短く、1924（大正15）年には郡役所としては閉庁している。その後は上高井郡連合事務所、上高井地方事務所、長野県上高井事務所と名前を変えながら現在に至っている（写真4）。

8) 穀町

穀町は、大笹街道を境として東西で土地利用の傾向が異なっている。東側には富士通須坂工場と駐車場、田中本家がある。田中本家は豪商である牧家に奉公後、独立して財を成した豪商である。現在は財団法人田中本家博物館として一般公開されている。

街道の西側は住宅が中心で、局所的に駐車場が分布している。この地区でも、かつてはかなりの数の製糸工場があった。街道の西側は明治時代には家屋があまり見られず、市街地の末端にあたる地区であった。東側には現在の富士通の工場用地を中心として規模の大きな製糸工場が立地していた。

Ⅲ-2 景観

1) 蔵の分布

第6図は須坂市中心部の蔵の配置を示したものである。この図に46の蔵の分布が示されている。須坂市内には現在多くの蔵が残っているが、明治



写真4 旧上高井郡役所
(2002年6月、小田撮影)

から昭和初期にかけて生糸業が発達していたことがその要因である。生糸業においては湿度や温度が一定に保たれる蔵が、糸の保存に適しており、一つの工場に一つ以上の蔵があった。そのため当時は現在よりはるかに多くの蔵があった。

上述のような理由から、現在の蔵の分布はかつての製糸工場の分布と重なっているところが大きい。しかし、現在に至るまでの土地利用の変遷を経て、特定の地区においては蔵がみられなくなった。

東横町は、旧市街地入り口であった西側に多くの蔵が残っている。かつて牧一族が興した「山一」「山二」「角一」などの製糸工場群が存在していたが、その工場の蔵が現在まで残ったために、図のような分布がみられる。

新町にも多くの蔵がある。新町で製糸工場を営んでいた勝山家と浦野家の蔵、そして味噌・醤油を製造販売している「塩屋」の蔵が明治から現在までそのまま残っているために、多くの蔵が残っている。

上町、穀町などはかつてかなり多くの製糸工場があった。しかし、製糸業の衰退により工場が取り壊されたところが多く、蔵もほとんど残っていない。

2) 蔵・商家の色彩

第7図は、調査対象地域内にある蔵・商家、また修景事業を利用して、外見を蔵や商家に似せた建物外壁の色彩を調べて、分布を表した図である。

修景事業については第IV章で詳細に取り上げるので、ここでは簡単に記述する。須坂市では街なみ環境整備事業が行われている。市が定める特定の地区に現存する蔵や商家を修理、あるいは新たに歴史的な街なみに調和するように建物を改修しようとするものに対して、市から補助金がでるといふ事業である。この事業は1993年から実施され、修理72件・修景98件、合計170件の実績がある。調査を行った地区の大部分が街なみ環境整備事業の実施地域となっている。

調査地域には、この街なみ環境整備事業によっ



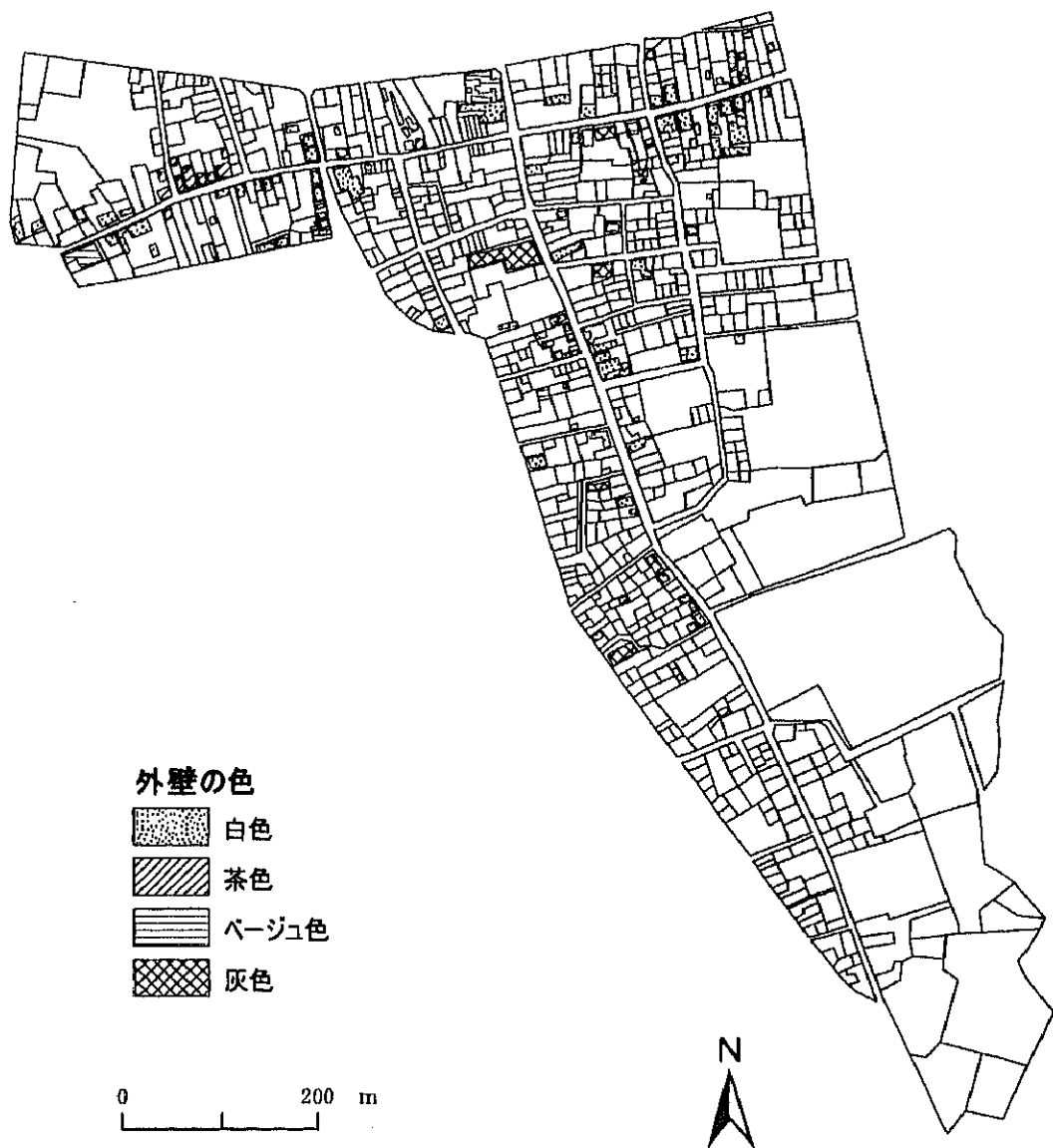
第6図 須坂市中心部における蔵の分布
(2002年6月現地調査より作成)

て新しく修理・修景された建物と、そのような処置が施されていない古いままの建物が、旧態依然のまま混在している。街なみを考察することにおいては、建物の新旧をはっきりさせる必要がある。しかし外観からそれを判別することは困難であり、データも入手できていないためこの図では新旧の区別を行っていない。

まず建物の色彩は、4種類が確認された。それ

は白色・茶色・ベージュ色・灰色である。そして建物の色は建物外壁の建材の種類とある程度の関連がある。図上に表現されている建物は全部で147棟あり、そのうち白色とされた建物は86棟、茶色が10棟、ベージュ色が32棟、灰色が7棟あった。

東横町では牧家の製糸工場群と屋敷を始めとして、茶色系の色彩の外観をもつ商家造り・蔵が



第7図 須坂市中心部における商家・蔵の外壁の色
(2002年6月現地調査より作成)

多い。地区の東側では道路の拡幅工事が行われており、その道路に面して修景事業が行われた白色の外壁の住宅が並んでいる（写真5）。

横町ではそれほど修景事業は進んでいない。唯一の新しい建物である笠鉾会館ドリームホールは白色の壁を持ち、横町の西側に位置している。その他については『信州須坂の町並み』の横町の記述にあるとおりの古いままの街なみが今も残って

いる¹⁰⁾。金物屋の「八幡屋」はその中でも特に古い。小さな味噌蔵・薪蔵につづいて鋳物蔵と鉄蔵が、さらには文庫蔵がある。ベージュ色の外壁をもつ蔵の連なりが、老舗の金物屋の風格を感じさせる。

旧市街の中心である中町では修理・修景事業が進んでいる。長い伝統をもつ建築の多くは外壁が白く、通りの印象を明るくしている。小田切家、

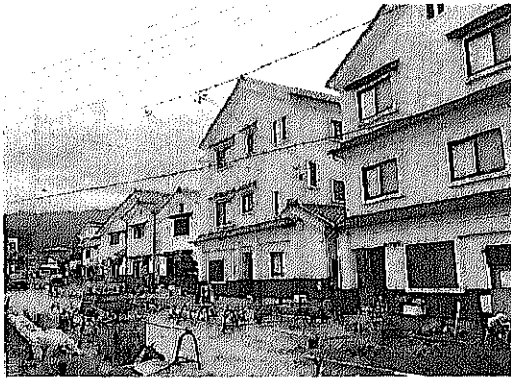


写真5 修景事業が行われた住宅
(2002年6月, 小田撮影)

中野家, 山下家などがその代表である。これらの商店や家屋は新しいだけでなく, その伝統と格式に見合うような意匠が凝らされている。山下家は特に須坂に2軒しかない「梶(うだつ)」があがる貴重な町家である。

新町は明治時代に今に残る歴史的建築物を建てた家が多い。それは明治期に製糸業を創業した, あるいは製糸業の盛況な頃に商売が繁盛した商店などが多かったからである。明治以降に立てた建築物の外壁は白色が多いと, 今回の調査で経験的に感じられたが, 新町の町家・商家・蔵もその例に漏れず外壁は白色である。

上中町・本上町・上町は, 商家造りや蔵は中町や東横町, 新町と比べると少なくなってしまう。しかし特色のある建築物がある。それは高層の集合住宅である。上中町のクラージュ須坂がその代表例である。クラージュ須坂の建設が1999年5月に策定された須坂市中心市街地活性化計画において, クラージュ須坂の建設が都心居住の促進を目的とした事業として記述されている¹⁰⁾。それによると, 須坂の中心市街地での老朽化した建物の更新を目的としながらも, 歴史的景観に配慮した建築物とすることが記されている。現在クラージュ須坂は完成している。外壁は灰色である。そして屋根には瓦が葺いてあるようにみえる工夫がなされている。本上町や上町にもクラージュ須坂に類似した高層の集合住宅がそれぞれ一棟あるが, や

はり外壁は灰色で, 屋根瓦が葺いてあるようにみえる塗装がなされている。

また大笹街道沿いには遠藤酒造などの歴史的な建造物も幾つかある。それらの建物の外壁は白を基調としているものが多い。

3) 外壁の建材

第8図は蔵・商家, もしくは蔵・商家風の建物の外壁の材質についてまとめたものである。調査した建物は93棟で, 外壁が漆喰であると思われたものが38棟, コンクリートが6棟, 土壁が35棟あり, 外壁がトタンに覆われており判別できなかったものが1棟あった。なお, 新町・常磐町・中町の東側一部の区画に関してはデータの欠損のため, 地図が描けなかった。

建物のほとんどが石材と漆喰であるが, それは街なみ環境整備事業の修理修景基準に沿っているからである。住宅・店舗・土蔵については, 修理修景するときには外壁を中塗り仕上げかあるいは漆喰仕上げにせねばならないために, この2種類の外壁しか見られない。

コンクリートを外壁としている建築物は, 鉄筋コンクリート・鉄骨造と区分されており, 他の建物より基準が緩く漆喰仕上げまたは土塗り仕上げを基調としながらも新建材の使用が, 周囲の景観と調和するという条件を満たしていれば認められているために外壁がコンクリートとなっている¹²⁾。

東横町では漆喰と土壁の割合がほぼ同じである。牧家の建築物はそのほとんどが土壁である。塀は本土塀で二階建ての重厚な土蔵造りの平入りの母屋である。ふれあい館まゆぐらの向かい側の通りで, 東横町の中ほどに位置するところに土壁の商家造りの家が軒を連ねている。第7図と対照すると, これらの建築がそろって茶色であることがわかる。

横町では, 金物屋の「八幡屋」の蔵と家屋が目される。外壁の色の記述においても触れたように, 土壁の古い蔵が並んでいる。

中町では修景した建物と修景していない建物の特徴が現れている。小田切家が土壁であるのに対



第8図 須坂市中心部における商家・蔵の外壁素材
(2002年6月現地調査より作成)

して、中野家は漆喰作りである。小田切家は土壁で塗りこめた長屋門が目を引く。

上中町・本上町・上町などで注目されるのは、他の地区にはない高層の集合住宅である。鉄筋コンクリートの3階建て以上の建築物は、修理修景基準のなかでは新建材の使用も認められているが、調査した集合住宅はすべてコンクリートの外

壁を土壁風に見せたものであった。

Ⅳ 行政・市民の有志によるまちづくりの取り組み

Ⅳ-1 まちづくり運動の沿革

現在の須坂市における街なみ保存運動の最初のきっかけとなったのは、1985年4月13日から須坂新聞に掲載された「信州須坂の町並み」であった。

地元小学校教員の丸山武彦氏によるスケッチをもとに、同じく須坂で教鞭を取っていた青木廣安氏が須坂の蔵の街なみを解説するという形式で、100回に渡って連載されたこの新聞記事は、須坂における民家や街なみの美しさを住民に知らしめ、ふるさとへの愛着・誇りを喚起する大きな役割を果たしたのである¹³⁾。連載が始まると須坂市の歴史的街なみを保全しようという機運が高まり、1986年には市民有志により、街なみの保存と修景・整備を中心課題としつつ、同時に空洞化の目立つ市街地の活性化と市域の文化・経済・産業振興に寄与することを目的として「信州須坂町並みの会」が結成された。この連載が始まった当時は全国的に景気の拡大が続いていた時期であった。須坂も例外ではなく、経済優先の考え方による開発が市内の至るところで行われており、貴重な須坂の歴史的街なみが失われていたのである。そのような現状を憂いて、信州須坂町並みの会の有志らは1987年6月、全国町並み保存連盟による松坂全国ゼミに参加した。「蔵や商家造りの建物がまとまりを持って残されている須坂の街なみは全国的にみても稀であり、後世に残していくべきである」。このように会員らは訴えて、須坂の現状を全国に訴えたのである。これに応じて全国町並み保存連盟は、同年11月に全国町並み保存連盟幹事会を須坂市で開催した。このイベントによって須坂市の歴史的街なみの価値は全国に知られることとなり、市民主体の街なみ保存運動は具体化されていった。

積極的な市民組織の働きかけにより、行政サイドからも街なみ保存に対する活動が行われるようになっていった。1988年には須坂市教育委員会の依頼により、日本ナショナルトラスト（財団法人観光資源保護団体）による歴史的街なみの保存調査事業が行われた。この調査の目的は「街並み保全のための基礎資料の作成」とされた。須坂の街なみの特徴として、調査対象だけで約90棟、未調査の建物も含めると旧市街地に約200棟の歴史的建造物が残っていると推測され、倉敷・川越・栃木・喜多方などの有名な土蔵の町に劣らない数がある。

また須坂市における土蔵造りの建造物は主に製糸業が盛んであった明治中期から大正前期に建築されたものであり、色彩（白塗り・黒塗り・なまこ壁など）や階数（平屋・2階建・3階建）・屋根の形などで非常に変化に富んでいる。さらに土蔵造りの町家以外に、明治・大正時代の洋風建築や神社・寺院建築の優れたものが多数残されており、伝統的建造物の保存状態が比較的良好である、との4点が確認された¹⁴⁾。

1989年には市の教育委員会主導で伝統的建造物群保存対策調査が行われた。その結果、347棟の歴史的建造物がある程度のまとまりをもって分布していることが明らかになった。須坂は明治から大正期にかけて製糸の町として発展したが、その後製糸業が衰退していったことで市の経済状態が悪化し、蔵を取り壊されなかったことが前述したような分布の一因となった。このような状況は全国的に見ても非常に稀なケースであり、須坂における街なみ保存の機運をいっそう高めることとなった。1990年に市は歴史的地区環境整備街路事業調査を実施し、1992年から1993年にかけて歴史的地区環境整備街路事業を行った。街なみ保存の動きはその後も継続され、1993年には「須坂地区歴史的景観保存対策事業補助金交付要綱」を施行して、国から補助金を得るに至った。さらにまちづくり要綱を策定し、現在行われている街なみ環境整備事業が1995年から実施されたのである。これらの施策によって、製糸業の衰退後失われつつあった歴史的景観が修復され始め、須坂市は蔵の町として全国にその名を轟かせるに至ったのである。現在、様々な課題を抱えつつも須坂市は市民と一体となって、蔵の町、歴史の町を中心に据えてそれらの解決に日々取り組んでいる。

Ⅳ-2 まちづくり協定と協議会制度

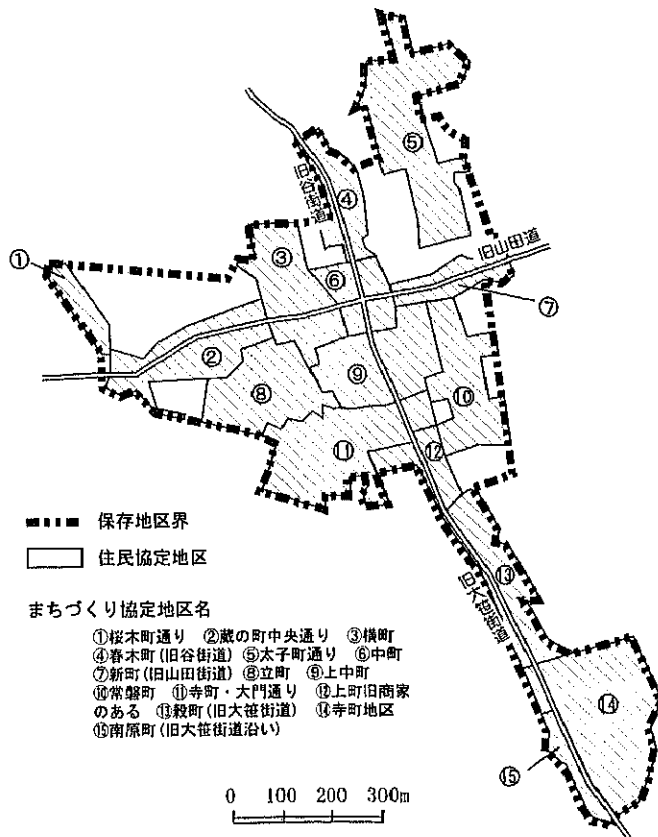
1) まちづくり要綱とまちづくり推進協議会

「須坂市須坂地区まちづくり要綱」（以下、まちづくり要綱）は1994年に策定され、翌年施行された。その主旨は「須坂地区の歴史的町並みとその環境を保全し、歴史を生かしたまちづくりを進め

るため、須坂地区のまちづくりに関し、必要な事項を定める」ことにある¹⁰⁾。教育委員会による伝統的建造物群保存対策調査が行なわれた地区のうちの48haが歴史的街なみの保存地区として定められた。この保存地区における土地所有者がまちづくり協定を締結して、建造物の維持管理に関する意思決定を住民自身で行なっている。

現在のまちづくり協定地区は市内に15地区存在する。この地区の概観を示したものが第9図である。1993年に須坂地区歴史的景観保存対策事業補助金交付要綱が施行され、これらの15地区における建物の修理事業（既存の歴史的建造物の修復）に対し、市から補助金が交付されるようになった。事業対象となる経費と補助金額の概要を第1表に示す。建物だけでなく、屋外広告物や生垣・

側溝も事業対象とされており、建物については屋根や外壁・門の素材の統一、テレビアンテナや電気メーター等の付帯設備についても覆いをするか指定された色彩にするなどの厳しい基準が設けられている。この基準を満たしたものについては、修理事業については500万円を限度として、事業実施者は総費用の3分の2の額を補助金として受け取ることができる。また、修理事業の建造物に該当しない建築物・工作物・屋外広告・石垣・側溝・生垣などで、街なみの景観を損なわず、伝統的な建築に模したのもの、あるいは景観に調和する和風建築に外観を改修する修景事業については、建築物は300万円を限度に、工作物は50万円を限度に、屋外広告と石垣、側溝は30万円を限度に、生垣は10万円を限度にして3分の2が補助金とし



第9図 まちづくり協定締結地区（2002年）
 （須坂市まちづくり課資料により作成）

第1表 修理・修景事業の実施基準

事業名	事業対象経費
修理事業	建築物の修理 昭和初期までに建てられ、「須坂市伝統的建造物群保存対象調査」で対象となった建築物及び歴史的景観保存に必要な建造物で、その概観の修理に要する経費
修景事業	建築物 修理事業以外の建築物で、原則的に公道に面しており、概観を伝統的建造物に模したものであるいはそれに調和した和風建築とする際に要する経費
	工作物 伝統的な形式により、周囲の景観に調和した新設または復旧に要する経費
	屋外広告物など 町並み景観を損なわず、歴史的景観になじむデザインや色彩とするものに要する経費
	石垣・倒溝など 周囲の景観に調和した新設または改良に要する経費
	生垣 周囲の景観に調和した新植または改植に要する経費
その他	市長が特に認めた事業に要する経費

(須坂市まちづくり課資料により作成)

て交付される。その他にも、市長が特に認めた事業に要する経費については100万円を限度に3分の2以内の額が援助される。市の補助金は2001年までの9年間に49,228万円に上り、1995年からは国からの援助も行なわれるようになってきている。

2) 修理・修景事業実施の地域的差異

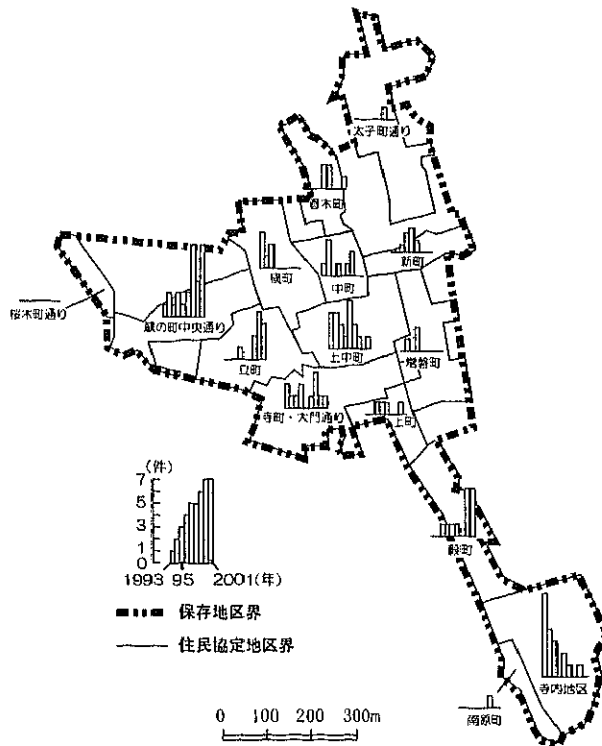
ここでは前述した修理・修景事業の施行数から、協定地区別にみた街なみ保存の地域的差異を考察する。同事業の実施箇所の分布を第10図に示した。修理・修景事業の実施は保存地区内で一様ではなく、まちづくり協定地区ごとに異なった傾向がある。中には「桜木町通り地区」のように、協定が結ばれていてもまったく事業が行なわれていない地区も存在する。

もっとも事業数が多かったのは保存地区の北西部に位置する「蔵の町中央通りまちづくり協定地区」であり、その総事業数は24件であった。この地区の西端部には、前章でも述べた、文化的価値の高い旧製糸家の建物が集中している(写真6, 7)。これらを保存するために数多くの修理事業が行なわれたと考えられる。この地区における街なみ保存に対する意識の高さを象徴している建物が「ふれあい館まゆぐら」である(写真8)。ふれあい館まゆぐらは、かつて製糸業を営んでいた田尻製糸の繭を貯蔵する繭蔵として利用されていた建物である。もとは現在よりも約200m南に位置していたが、都市計画道路の新設により解体の危機にさらされた。しかしこの建物の歴史的価

値を惜しんだ協定地区内の住民から保存を望む声が上がったため、市がこれに対し曳き家¹⁹を行い、建物を移転させ、修理した。そして2002年4月に移転・修理が終了し、蔵の街なみを楽しむ人々が気軽に立ちよって利用できる休憩所としてオープンした。須坂は歴史的建築物が市内の広い範囲に分布しているにもかかわらず、休憩所がなかった。そのため観光客がゆっくりと街なみを散策する際に問題点となったが、ふれあい館まゆぐらのオープンによってそれは解消された。このふれあい館まゆぐらは旧製糸家の館が立ち並ぶ地区にあって、それ自体も製糸業が栄えた時代の遺構を残した建物である。現在は蔵の街なみを楽しむ人々の憩いの場として、また須坂の歴史に触れることのできる場所として利用されている¹⁹。

また、この地区では比較的最近実施された事業が多い。先に述べた都市計画道路建設による既存道路の拡張工事は現在も続いており、その沿道には旧製糸家の蔵の建築様式を模した一般住宅が立ち並んでいる。

一方で研究対象地域の北部に位置する寺内地区は、総事業数が18とかなり多い。事業が実施されるようになった1993年には7件、その後も1994年には4件、1995年には3件と、比較的早い時期から多くの建物の修理・修景事業が行なわれており、この傾向は前述の蔵の町中央通り地区とまったく異なっている。この地区には江戸時代中期に商家としての地位を確立した豪商、田中本家がかつて



第10図 修理・修景事業実施箇所（2002年）
 （須坂市まちづくり課資料により作成）



写真6 旧製糸家の建物①

道路に面して平入りの母家（手前）と妻入りの土蔵（奥）とが立ち並ぶ。壁の補修や屋根瓦の葺き替えを丁寧に行なっており、明治初期の豪壮な屋敷構えが保たれている。

（2002年6月，小田撮影）

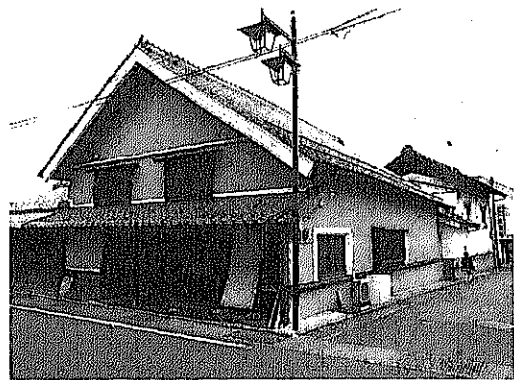


写真7 旧製糸家の建物②

須坂では珍しい妻入りの町屋。1989年に発行された『須坂の歴史的町並み』に掲載された写真では建物の前面にファサードが付けられていたが、現在ではそれが取り払われて整然とした景観が保たれている。

（2002年6月，小田撮影）

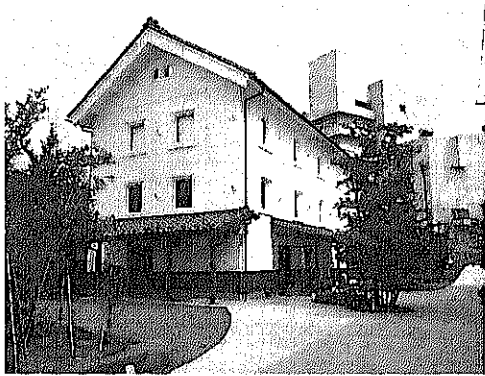


写真8 ふれあい館まゆぐら
(2002年6月, 小田撮影)

屋敷を構えていた。旧街道に面して伸びる白壁や土蔵の土台のぼた餅石積みは創建当時の趣を残しており、また敷地内を流れる水路は製糸工業が隆盛だった頃の面影をはっきりと残している。現在では田中本家は、商家として栄えていた時代に所持していた着物、雛人形、漆器、玩具などを展示する博物館として公開されている。また、同地域は5つの寺がある閑静な寺院地区でもある。上述した2つの地区の事例から、須坂における歴史的街なみの保存運動は地区によってかなり違いがあるといえる。

Ⅳ-3 市民主導によるまちづくり運動

1) 信州須坂町並みの会

保全よりも開発が重視されていた1974年に、「郷土の町並み保存とよりよい生活環境づくり」を目指し全国町並み保存連盟が設立された。この連盟最大のイベントである「全国町並みゼミ」が1978年に名古屋市有松で初めて開催され、街なみ保存の機運が全国的に高まった。そのような中で、須坂市においても1986年に「町並みを整備して地域の活性化を図る」ことを目的に「信州須坂町並みの会」が結成された。

会の事業は(1)講演会・研修会の開催、(2)調査・研究活動、(3)普及活動、(4)関係機関との交流、(5)会の増強、(6)各部会の活性化、(7)機関紙(町並み通信)の発行と様々な分野に

及んでおり、年2回の他都市の街なみ見学や、古代米の紫米など地場産品の開発をおこなっている。なかでも会が1989年から毎年行っている「信州須坂町並みフェスト」は、須坂の歴史的街なみを全国的に知ってもらうための広報活動として、大きな役割を担っている。

これらの活動やイベントは、市民の有志や会を構成する会員によって支払われる会費によって支えられている。2002年度の信州須坂街なみの会収支予算書によれば、会の予算額は2,333,630円であり、そのほとんどが賛助会費(2002年度予算額700,000円)と会員一人あたり3,000円の年会費(同450,000円)によって徴収されている。

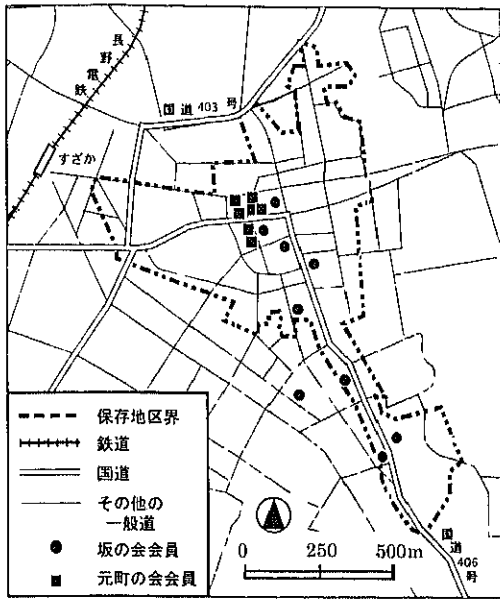
会の地道な活動は現在も進められており、2001年の街なみフェストの際には60の施設が敷地内の庭や蔵、建物内の座敷を一般に開放し、期間中は会の普及活動によって育成したガイドが須坂の街なみ案内を勤めた。修理・修景を行なった建物の所有者にはそれを公開する義務があるわけではないが、このようなイベントに積極的に参加していることから、住民の街なみ保存への意識の高さがかがえる。

2) 坂の会・元町の会

坂の会・元町の会は市民の側からまちづくりにさらに積極的に参加していくことを目的として、信州須坂町並み保存会結成当時のメンバーによって設立された。会員の分布を第11図に示す。

会の名称、会員の分布する地域は異なっているが、2つの会の活動内容は一致している。会の活動の目的は、須坂で生まれ育ったものとして、歴史的建築物や文化を保護し、須坂人としてのアイデンティティーを再認識することである。失われていく須坂の街なみを通して、須坂人として持つべき郷土への誇りや愛着がなくなってしまうとの危機感から、この2つの会は設立された。

会の具体的な活動のひとつとして、「信州須坂ひなまつり」がある。2002年の旧暦のひな祭、つまり4月3日に、30件の民家が所有する雛人形を一般に公開したイベントである。旧製糸家が蔵に保管している雛人形も公開されたため、予想を超え



第11図 坂の会・元町の会の会員分布（2002年）
（坂の会・元町の会資料より作成）

る観光客が訪れた。さらに、五月人形を公開する「男衆（オトコシヨ）祭り」も開催された。

これらの活動は、観光客の誘致については一定の成果をあげた。坂の会・元町の会では、今後も観光客を増やすだけでなく、須坂に住む住民自身が須坂の良さに気づき、郷土への愛情が育まれるような活動をしたいと考えている。

Ⅳ-4 街なみ保存に対する住民の取り組みの事例

ここでは修理・修景事業の具体的な事例を通して、この事業に対する市民あり方の一例を取り上げ、考察を試みたい。

1) 中野氏（綿幸店主）の事例

中野氏は呉服店を営んでおり、中町の大笹街道に面して店を構えている。1848年の善光寺地震までは長野で現在と同様に呉服の商いで生計をたっていた。しかし地震によって長野市が大きな被害を受けたことを契機に、須坂に生業の場を移した。

現在店舗として用いられている建物は、もとあった蔵を利用したものである。呉服店という商売柄、室内の温度が安定しており、防火・耐火建築に優れた蔵は着物の保管に適していた。また蔵が買い物客の興味をひきつけるということも、蔵を店舗に改築した理由の一つである。豪壮な造りの蔵は人々に高級感を抱かせ、購買意欲を生じさせる機能も持っていると考えたのである。

中野家は須坂で150年以上商いを続けている。以前は上店と下店が並んでいたが、上店を改造して店舗とし、店舗の奥には着物を保管する土蔵が隣接している。店舗の中からは重厚な造りの土蔵を見ることができる。下店の中を改修して中野氏が集めた油絵等を展示がなされ、サロンとして訪れる人に公開されている。中野氏宅は内部の居間をタイル張りの土間に変えたりと改築が進んでいるが、建物の基本的な部材のほとんどは建築された当時のまま残されている。また近年、店舗の外壁を修理して、白壁の土蔵造りに建て替えた。中野氏は古くからの土蔵建築の長所を呉服店という生業に活用しつつ、かつ街なみ景観に蔵づくりの町屋という伝統的形態を生かす試みを積極的にこなっている。

また、中野氏は先に述べた『坂の会』、『元町の会』という商店主らによる勉強会を主催しており、住民の連携による街なみ保存を積極的に推進してきた人物である。須坂で古くから商売を続け、地元深く根付いているからこそ、ここまで強いアイデンティティーを持っているのだろう。

2) 上原衛氏（塩屋醸造代表取締役社長）の事例

新町に大店を構える味噌・醤油店が塩屋である。江戸時代はその屋号が示すように、塩を商っていたが、塩の質が悪く溶けるなどの困難があったために味噌・醤油の商いに切り替えた。味噌・醤油の製造は須坂の気候風土に適しており、品質の良いものを作ることができた。明治時代に須坂が紡績業で大きくなると、工場に勤める女工などが有力な客となって店が大きくなった。

上原氏も須坂の活性化に対して情熱をもって取り組んでいる。1986年に発足した信州須坂町並み

の会の発起人の一人であり、会の中心メンバーとして長い間会を支えてきた。当然のことであるが、地元を根を下ろして商売をしているため、修景・修理を早い段階で行っている。

上原氏は宗教学者の福富氏の影響を受けて、須坂の活性化に取り組み始めた。福富氏の指摘をうけて、歴史的建築物や文化が次々と消えていく中で「蔵を成仏させる」ということを上原氏は、蔵を積極的に活用した商売をすすめて、繁盛することが蔵の寿命をまっとうすることになると解釈した。そして、それを実践するためにまず行ったのが、蔵の一般公開であった。さらに、味噌・醤油の販売方法としては当時画期的であった、ダイレクトメールを使った販売などを行った。

上原氏も中野氏と同様に、街なみの保存を観光客の誘致を目的に行おうとは考えていない。その点については前述の中野氏と同じ考えを持っている。

V 結論

本研究では長野県須坂市を事例として、須坂市の製糸時代からの都市・産業の発展過程による伝統的な敷地利用を踏まえながら、蔵造り・大壁造りの建物を中心とした歴史的街なみの保存活動を行政と市民の取り組みから明らかにした。得られた知見は以下の通りである。

まず、須坂市における歴史的建造物には明治から大正期にかけて発展した製糸業に関連するものが多く、その分布は裏川用水網と深く結びついている。すなわち須坂市においては、傾斜による水の流れをうまく活用することで、水車を動力とした製糸業が行なわれていた。そのため、旧製糸家の建物は裏川用水の水路沿いに多く立地している。

また、敷地内の建物の分布もこの裏川用水と無関係ではない。聞き取り調査によって明らかにした2件の旧製糸家の屋敷地利用は、水車小屋に隣接した工場と、それを中心とした建物の配置という点で共通している。母家や製糸業関連施設が敷地内で分散することなく配置されていたことが、

建物が取り壊されずに現在でも利用されていることの要因となっている。

製糸業の衰退から須坂の歴史的街なみは、急速に失われていった。土地利用調査の結果をみても、そのことがはっきりと現れている。製糸工場があった区画は、主に住宅地などへの転用が進んでいる。しかしその一方で、歴史的街なみの保存の動きも進んでいる。蔵や商家造りが残っている地区では、街なみ環境整備事業によって、色彩や形状が整った景観が形成され、歴史的街なみがよみがえっている。このような動きは今後も進んでいくものと考えられる。

このような歴史的街なみの保存については、住民の側からその必要性を迫る声が上がリ、次第に行政も歴史的街なみの重要性を認識するようになったことで、現在の行政と住民が一体となったまちづくり、街なみ保存運動が行なわれるようになった。1989年に須坂市教育委員会によっておこなわれた「伝統的建造物群保存対策調査」によれば、須坂市においては旧製糸家の建物を中心とした歴史的建築物が比較的まとまりを持って残されており、これは全国的にみても稀有なケースであることから、須坂市における街なみ保存運動をさらに活発にさせる要因となった。1995年からは歴史的建築物の修理、あるいはそれに模した景観への修景事業に対して市から補助金が出るようになり、次第に失われつつあった歴史的景観が復元されるに至っている。しかし、このような歴史的景観の整備は市内で一様ではなく、土地利用などにも現れている地域の特性に大きく影響されている点が本研究により明らかになった。すなわち、民家の少ない寺院地区においては比較的早い時期から歴史的建築物の保存が行なわれており、一方で都市計画道路の建設など都市化の影響の大きい地域においては、開発と保全のバランスをとりながら、行政と市民が一体となってまちづくりを進めているのである。

以上、須坂市における街なみ保存運動、そしてそれによるまちづくりの機構を土地利用調査と聞き取り調査によって明らかにした。ここで、今後

のまちづくりの展開について若干の考察を加えた。歴史的景観を生かしたまちづくりは住民の郷土への愛着を喚起し、全国的に問題となっている若年層の流出や中心市街地の空洞化を緩和するだけでなく、観光客の誘致により地域全体の活性化をも促すとして、今後さらに重要性を増すものと思われる。本研究で対象とした須坂市においては、歴史的街なみの「保存地区」内にある旧製糸家や商家の建物を修理し、またその地区内にある民家を歴史的街なみに調和した景観に修景することで、往時を偲ばせる街なみ保存を行なっていた。須坂市商工観光化においては、人工的に作られた街なみでは観光客に対するアピール力が弱いという考え方から、今後は歴史的な背景を考慮し

たまちづくりを進めていくようである。その一環として、旧山田道に礫を敷き詰めて歩行者有線道路とし、水路整備を行うことによって、住民や観光客が須坂の歴史を感じながら歩くことのできるまちづくりが予定されている。現在の須坂市の施策は、修景・修理事業などを通して目に見える形で成果が現れている。その点においては一定の評価ができよう。しかし、同様の施策をとっている自治体は須坂だけではない。蔵の町としての須坂の魅力をいかにして観光客、また須坂市民にアピールしていくのか。今後は他地域との差別化を図りながら、地域の個性を最大限に活かしたまちづくりが課題となろう。

本稿を作成するにあたり、須坂市役所まちづくり課、商工観光課の皆様からは、大変貴重な資料を頂くとともに、調査に快くご協力いただきました。元町の会・坂の会会長の中野博勝氏、信州須坂町並みの会の浦野治郎氏、田子昭治氏、新町協議会の上原衛氏、勝山一男氏をはじめとする多くの方々から多大なご協力を頂き、今後の須坂市におけるまちづくりについての貴重なご意見を伺うことができました。また、筑波大学地球科学系技官の宮坂和人氏には、土地利用図の製図をしていただき、現地調査の際にも有益なご助言をいただきました。末筆ながら、以上を記して厚くお礼申し上げます。

[注および参考文献]

- 1) 溝尾良隆・菅原由美子 (2000) : 川越市一番街商店街地区における商業振興と町並み保全, 人文地理, 52, 300-315.
- 2) 上高井誌編纂会 (1960) : 『上高井誌・社会編』上高井教育会, 256-257p.
- 3) 末尾は、1878~1880 (明治13~15) 年の3か年の『共武政表』に基づいて、水車の全国分布を明らかにした。
末尾至行 (1980) : 『水力開発=利用の歴史地理』大明堂, 3-54p.
- 4) 須坂の製糸業に関する工場全数、釜全数、従業員全数、また、各製糸所に関する各種データに関しては、以下、本報告では田子昭治氏の刊行した『蚕糸業沿革誌』所収の各資料に主に基づいている。
田子昭治 (1998) : 『蚕糸業沿革誌—農工商共に栄えた近代産業黎明の歴史—』自費出版。
- 5) 横町通り付近以北、および横町・東横町地区に関しては、不明箇所が多いため作図していない。結果として、『上高井誌』所収の今井図とは一致しない部分もあるが、あえて修正は施さなかった。今井図に誤記があるのか、後に流路変更がなされたのかは定かではない。
- 6) 1986年須坂新聞に『信州須坂の町並み』が100回にわたって掲載され、それを契機に信州須坂町並みの会が発足した。その後、この会を中心として町並み保全運動が展開された。
- 7) 田子昭治 (2002) : 『ふるさとの歴史読本 須坂物語 付開拓者・指導者人物誌』自費出版, 103-113p.
- 8) 前掲6) 9 p.
- 9) 信州須坂町並みの会『信州すざか 蔵の町 ご案内のしおり』。
- 10) 丸山武彦・青木廣安 (1988) : 『信州須坂の町並み 風土が生んだ蔵造りの民家群』須坂新聞社。
- 11) 須坂市商工観光課 (1999) : 『須坂市中心市街地活性化基本計画』須坂市商工観光課, 43p.

- 12) 須坂市まちづくり課『視察資料 須坂市の概要』より。
- 13) この連載記事は後に単行本（丸山武彦・青木廣安（1989）：『信州須坂の町並み－風土が生んだ蔵造りの民家群－』、須坂新聞社、269p）にまとめられた。
- 14) 日本ナショナルトラスト（1989）：『須坂の歴史的町並み』日本ナショナルトラスト、104p。
- 15) 須坂市まちづくり課資料による。
- 16) 曳き家とは建物の下に土台を組み、レールを乗せて建物を引きながら少しずつずらすことで、建物を取り壊すことなく移動させる高度な技術である。
- 17) ふれあい館まゆぐらは休憩所だけでなく、機織体験をすることで製糸都市としての須坂の歴史に触れてもらうという役割も担っている。